

紀元二千六百年記念

紀元二千六百年は皇紀二千六百年とも言った。初代神武天皇即位から数えての年号である。私にはこの年二つのエピソードがあり、忘れられない年だった。

パソコンで調べたら出ていた。西暦一九四〇年は昭和一五年で、私は一五才だった。小学校を卒業した次の年、山ノ入の珪澡土山で働いていた頃だ。

エピソードの一つ目は、普通の民家では殆ど無いくらいの立派な風呂を建てた事だ。あの当時で五〇〇円、今の金銭価値だと五〇〇万円位だろう。どうしてそんな風呂を建てたのか、訳を綴ってみたい。

父文一郎が円田村農業組合長の椅子を引き継いだ。前組合長は、今でも県内有数の会社の社長になった大人物である。

父は組合長になってビックリ。前組合長の使い込みで、組合は破産状態である。いくら催促しても埒があかない。前組合長に盾突く人は誰もいないのである。

父は前組合長に噛みつき、裁判所に訴訟を起して真っ向から戦った。そして勝った。

その時に返して貰ったお金は、自動車で一台分あったという話が残っている。あの当時の車は、今の軽自動車並だった。

しかし、返して貰わなかったら、組合の理事全員して負担しなければならぬ。各個人とすれば由々しき金額であった。

組合を救ってくれた父に感謝して、理事全員で、なにがしのお金を出し合い五〇〇円を作り、父に進呈した。

父はそのお金で風呂場を新築した。浴室は三畳位で出窓付。トイレは大が二つ、小が一つ、風呂の焚口は一坪。灰置き場も防火材で作った。あの当時は珍しいガラス戸。屋根は瓦葺きだった。

一番印象に残るのは、浴室の窓の下の洗い出しモルタルに刻んだ、「皇紀二千六百年記念」の銘である。

生家の建替えで、取り壊し今は無い。写真を見ると記憶が甦る。

この年村内各地区部落では、皇紀二千六百年記念式典イベントが様々な形で行われた。北部平沢地区では、日吉神社の御輿が一日中部落を駆けめぐり、神社のお祭り以上に賑わった。

近年御輿は自動車に乗り、部落を一周するが、昔は四人で担ぐ重労働だった。その時の担ぎ手の一人が私だった、十五才の少年である、珪藻土山で鍛えているとはいえ、よくも一日中へこたれず頑張ったものだ。御輿は相当重い、一人当たり四〜五十キロの荷重だ。

その二年後十七才の夏、国民徴用令にて、横須賀海軍工廠受信実験所に、その時の四人の内三人が一緒に入所したのは、何かの因縁だったのだろうか。

平成十四年四月二十五日